びじゅつって すげぇ! 2015-2016

目次

ごあいさつ……1

空をながめて、美術館に行こう

Ⅰ びじゅつって、すげぇ!
- ・美術は日常の中にある……3
- ・身体と感覚を目覚めさせよう……5
- ・美術は決して特別なモノではない……7

Ⅱ 大分の「すげぇ!」を集めた教材ボックス
- ・ひとつひとつが小さな美術館……9
- ・夜のおとなの金曜講座……11
  - 視るは楽しい教材ボックス……12
  - 大分県から絵の具をつくる……17
  - 美術からみた文化……18
  - 素材と技術

Ⅲ みる、つくる、かんじる美術体験プログラム ワークショップ&レクチャー
- ・どなたでもワークショップ「アトリエ・ミュージアム みんなでつくろっ!」……19
- ・みんなの土曜アトリエ 体験から鑑賞まで……23
- ・特別ワークショップ&レクチャー……27
- ・ワークショップができるまで……35

遊び場としての美術館

Ⅰ 「見る」から「視る」へ
- ・作品を「視る」ということ……37
- ・美術館へ遊びに行く……39

Ⅱ スクール・プログラム
- ・びじゅつかんの旅……41
- ・アウトリーチ・プログラム……45
- ・先生のための講座……47
- ・ファーストミュージアム体験事業……49
- ・学校と美術館の連携……51

大分県内アウトリーチ&フィールドワーク実施地図……53

実施一覧……55

ご挨拶

「アートフル大分プロジェクト実行委員会」は、大分県立美術館を核として構成された実行委員会であり、文化庁の助成により、「地域と連携した美術による人材育成事業」に取り組んでまいりました。

その一環として、「美術に出会うこと・美術作品を見ること」に関する考え方と実例をテキストとしてまとめ、地域の指導者にご提供することとしました。地域の様々な方々に新たな視点からアートに出会っていただくための参考として活用していただければ幸いです。

アートフル大分プロジェクト実行委員会

郷土の生んだ偉人の一人に三浦梅園がいます。彼は、長崎と伊勢への三度の旅行以外は、その生涯を国東で過ごし、万巻の書を読み、思索に耽(ふけ)りました。そして、完成させた梅園の思想体系は、内藤湖南などから高い評価を得ています。「枯れ木に花咲きたりといふとも、先(まず)、生木に花咲く故をたずぬべし」は、有名ですが、「石を手に持ちて手を放せば、地に落つるはいかなる故ぞ」とも言っており、林檎(りんご)が木から落ちるのを見て万有引力の考えをまとめたニュートンも、梅園を知っていたらびっくりしていたでしょう。

梅園の、徹底した批判的思考力には驚嘆(きょうたん)しますが、その考えは深い教養に根ざしたものであり、そして、教養とは、知識の量ではなく、その知識を土台にして自分で考える総合的な能力です。そして、その総合的な能力の鍵となる要素は、「感性」なのです。バートランド・ラッセルも「教育論」で教育の目的として、活力、勇気、感性、知性を挙げています。

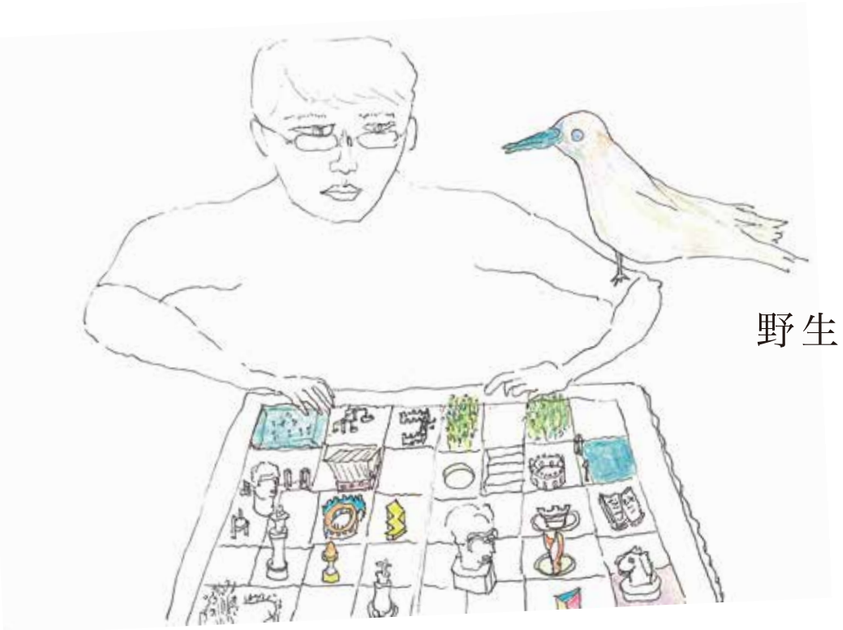
感性教育において、美術館が持つ教育機能は大変重要であり、開館一年前から体制を整え、学校や地域の公民館等で、地域の歴史や文化を「色」や「形」という美術的な視点から見直す、地元に密着した“大分県ならでは”の美術館教育の仕組みづくりに取り組んでまいりました。

そのような流れを受けて、広瀬知事の格段のご配慮のもと、県教育委員会と連携して、県内全小学生6万人を開幕展に招待しました。また、離島や山間地での小中学校を対象とした出張授業、地域や学校での巡回展を行い、さらには、採用2年目にあたる小学校教員等を対象とした美術館での研修なども実施してきました。

私は、少子化・高齢化が確実に予測される時代において、地域活動の持続的な発展を可能にするのは教育であり、自分たちの足元に元々あった地域の宝を、さらに磨くことで、各地域の人々が、地域への愛着と誇り、夢を持ち続け、それぞれの地域の発展につながっていくと確信しております。

この冊子は、美術館開館1周年を迎えるに当たり、美術館の活動のうち、感性の醸成に関わる活動を記録したものです。皆様方のご参考に供しますとともに、これからの活動の充実のため、ご意見をお寄せくださることをご期待申し上げております。

公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団
理事長　佐藤　禎一 | 元ユネスコ代表部特命全権大使 東京国立博物館名誉館長



野生の奪還のために

この我が身、宇宙の雛型にして、芸術の「原型」也。

二十世紀きっての神秘思想家であったルドルフ・シュタイナーは、人間の身体には、宇宙の、無限に広がる動態の秘密、そのすべてが隠されていると考えた。

私ども人間は、皆、生身の我が身一己そのもので、全宇宙の秘密を内包した、「宝の箱」なのである。

だが、生はまた永遠に、その解明開発の途上である。

天才モーツァルトの音楽を聴く時、私どもはまた、そこに開示されているものが、「変転し、移り変わり、瞬時も止まることの無い、自然と宇宙の動態変化」そのものであって、その微細で雄渾なる千変万化のなかに、人や地上の生命体すべてが等しく経験する、「今生き、今死に、生まれては死に、死んでは生きる」輪廻転生が、そのまま現前していることの驚異に、驚愕する。

「奇跡は、今まさに、起きている」。

それが、生の高揚の実感でなくて、何であろうか?

その瞬間こそが、すべての人間が芸術家たることのできる、希有で平等な、開かれた「永遠=今ここ」なのである。

新生OPAM大分県立美術館は、斯くなる思想をそのすべての活動の根幹にすえている。

以下にご紹介するものは、その日日の実践、苦闘と快楽の瞬時瞬間、そして、愛の物語である。

(註)
シュタイナーについては、すべて畏友松本順正、能勢伊勢雄師の、あるいは泰斗高橋巌先生の諸論を借りた。
モーツァルトについても、遠山一行先生の、あるいは先生のひくカール・バルトの論を借りた。

大分県立美術館 館長　新見　隆 | Ryu NIIMI 武蔵野美術大学芸術文化学科教授